

健康を考へる

保健婦としての経験を通して

蕪木秀枝

一 プロローグ

「ころんだので……六・九%、骨折したので……五・三%、かぜをひいたので……二・六%、眼がみえないので……一・一%、ただ何となく……三・七%」
何の割合がおわかりだろうか？ スキーに行けない理由？……職場を休む理由？……。

楽しい老後を夢みて、一生働きつづけて来たのに、こんなきっかけで、一〇年も二〇年も寝たきりになってしまうことがあるなどと、想像できるだろうか。あなただったら、あなたの家族だったら、絶えられるだろうか……。

「んだらうかーふとんがじめじめするー手や足が鉛のようだー寝がえりもできない。自分の娘もわからない。どなたさまですか」……「御飯、まだですか」……今御飯の後片づけをしている娘の心に、悲しさがこみあげる。
「人の一生は、重き荷を背負いて坂道を歩むがごとし、あせるべからず」と昔の人が言った。
何となく登り始めてしまった一生という山の頂が、ねたきりという灰色の台地なら、登りたくはない。……だが、自分の後には、若いパーティが続いていく。このまま登ればみんなついて来るだろう。道を変えなければ……あせらずにひと休みして地図を開こう。//アッタノ//

灰色ではない山が……しかし、遠いなア……回り道だなア……。

だが、どうせ、汗水たらしてここまで登って来た。よし道を変えよう。歯をくいしばって、もうひと頑張りしよう。無意識に登って来てしまったのは自分なのだから……だれの責任でもない。自分なのだから……。

二 高齢化社会はバラ色か？……

灰色か？

① ねたきり老人は作られる

昭和五十年に発足した横浜市の訪問看護事業は五年を経過した。全国に先駆けて発足したこの事業は、//潜在看護婦の

- 一 プロローグ
- 二 高齢化社会はバラ色か？……
灰色か？……
- 三 健康になるにはお金はかからない
- 四 健康の価値を知る婦人達
- 五 健康でいたいもの、この指とまれ

活用」という特徴もあって、さまざまな反響を呼んだ。//横浜方式」とだれかが名づけてくれたこの活動は、全国各地で根つき始めている。

すでに、初回訪問で把握した「ねたきり老人」は、六千人を超え、延六万回の訪問看護、家族への援助、介護技術指導を実施した。

横浜市は全国とくらべ、高齢者率も低く、また、ねたきり老人の割合も二・二%と全国平均の半分にとどまっている。

床づれ、失禁で家中に臭気が漂い、主治医から「もう一週間の命」と言われた患者が、訪問看護で、床づれは改善され臭気もなくなり、五〇日延命して終末を迎えた人。

表一 ねたきり老人になつたきり老人の割合 (50年~54年の平均) (%)

卒中	43.1
脳転倒	6.9
老すい	6.6
骨折	9.3
・折	4.2
・折	3.7
・折	2.6
・折	2.5
・折	2.2
・折	1.5
・折	1.1
・折	0.5
・折	0.5
・折	0.5
・折	0.5
・折	14.7
・折	4.1

ねたきり老人初回訪問集計

人達が多くいた。表一は、老人が寝ついたきりかけであるが、半数は、成人病と言われるものであることに注意してほしい。さらに、安静のとりすぎや、ころぶからと、注意して寝かせていた家族のい

関係ありそうだと書かれていた。平均寿命は、かつて、死亡の高かった乳児や、結核死による青年期死亡が激減したことによるところが大きく、中、高年齢者が確実に長生き出来るということではない。

同傾向を示し、加えて、肝疾患も増加している。また、肥満も成人期にとって、大きな問題と言える。特に、四〇歳以上の女性では、三人一人が肥満傾向にある。肥満は、高血圧、糖尿病、心疾患、動脈硬化との関連が深く、これらの疾患の促進因子ともなるの

天井を見て一〇年、ふろにも入らず、垢でこりかたまつた老人。一〇年ぶりに入浴して、垢をはがすのに四苦八苦し、ひと皮むけて、天国にいるような顔でスヤスヤ眠ってしまった。「気持ちよさそうに眠っていましたよ。別に変化はありません」と、主治医が往診結果を報告してくれた患者。

「人間は「動くこと」、「動くこと」がいかん大切なことを知らされた。これは、老人の問題だけではない。老年期疾患の素地は、壮年期に、すでに培われてきているのだから……」

特に横浜市においては、一位にがんが、おどり出ていることは、注目に値する。

やつと、自分で御飯が食べられるようになったら、家族から、「保健婦が余計なことをするから、御飯に時間が長くなって困る」と苦情を言われたり等々……

② 壮年期が分れ道―青年期は入口
五十五年七月六日の朝日新聞は「男は世界一、七三歳を超す。女は二位に、七九歳目前」と伸びる平均寿命について報じている。

また、厚生省の患者調査によると、五十三年に、病院や診療所で診察や治療を受けた人は、脳血管疾患、高血圧、がん、心疾患、糖尿病などの成人病が、一〇年前とくらべ、いずれも一・五倍から二倍となっており、死亡と

しかし、家族もなく、腰が曲つた老人が介護をし、疲労で倒れる人。家族ぐるみ、疲れきつて家庭が崩壊する悲惨さも保健婦達はたくさん体験して来た。

「また伸びた」と、複雑な気持ちで読みすすむうちに、平均寿命は、各年齢層とも伸びているが、男の四五歳前後の層だけは、それをささむ四〇歳前後、五〇歳前後の層とくらべ、寿命の伸びが小さかった。

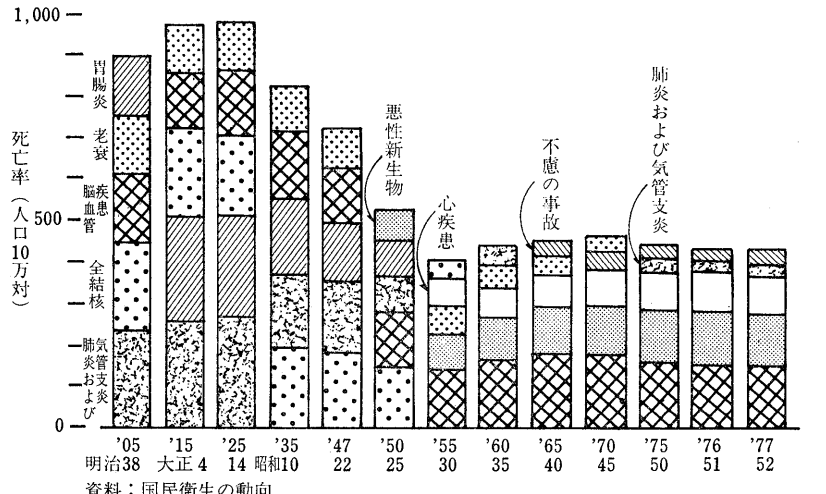
これは、昨年、一年間の統計で、四五歳から四九歳の男性の死亡が増加したことの反映で「ひ弱な昭和一ケタ」説とも

一日でも早く床から離れさせる」ことが、何よりも大切なことを周囲の人々が知っていたなら、こんな状態にはならなかったのに、と思わずにはいられない老

これは、昨年、一年間の統計で、四五歳から四九歳の男性の死亡が増加したことの反映で「ひ弱な昭和一ケタ」説とも

これは、昨年、一年間の統計で、四五歳から四九歳の男性の死亡が増加したことの反映で「ひ弱な昭和一ケタ」説とも

図一 死因順位の年次推移



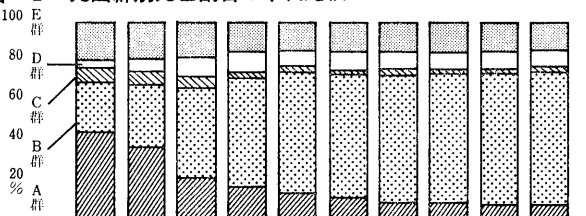
で、注意しなければならぬ。
い。

社会の仕組みが複雑になるにつれて、社会生活に適応出来ない人々が増加しつつあることは、健康な社会づくりの上で、大きな問題と言えよう。都市的な社会においては、住宅の狭小化や、過密化、高層化がすすみ、核家族化も、ますますすすんでくる中で、悩みや不安を打明け、相談するすべを持たない人々も多く、その解決法として、蒸発や犯罪に結びつくことも決して少なくはない。

表-3や図-4のように、若い母親達が、あり余る情報に迷い、悩み、そして苦しむ姿は、育児という大仕事をかかえているだけに、より問題も大きく、次の世代を担う子どもへの影響も無視できない。

●おとなは子どもに、何をなすべきか
親が子に大きな期待を寄せるのは世の常であるが、何を期待すべきなのだろうか？。科学がすすみ、文化が高まる中で、大きく飛躍する子どもの基盤となる「健康なからだ」を忘れてはいないだろ

図-2 死因群別死亡割合の年次比較



資料：国民衛生の動向
A群 細菌感染によるもの
B群 成人病
C群 妊産婦および乳児期の疾患
D群 外因死
E群 その他
伝染病および寄生虫病、髄膜炎、インフルエンザ、肺炎および気管支炎、胃腸炎、悪性新生物、良性および性質不詳の新生物、心疾患、高血圧性疾患、脳血管疾患、精神病の記載のない老衰
妊娠・分娩および産後の合併症、先天異常、出生時損傷、難産およびその他の無酸素症、低酸素症、その他の周産期の死因
不慮の事故、自殺、その他の外因
A、B、C、D群以外の全死因
注 昭和10年のB群には高血圧症は含まない

うか。
美しく、可愛い子ども姿を見ることは楽しい。しかし、真白な靴下やつるつるの膝小僧、ポッチャリした子どもの姿は、二十一世紀を背負わせるには、余りにもひ弱な感じを受けるのは私だけだろうか。
おとなの役割は、生来、子どもが持っている発育、発達のための体力、能力を自然のままに育て、これを阻害するあらゆるマイナスの因子を取り除く努力にこそあるのではないだろうか。
文部省体育局長の柳川氏は、「子育て

図-3 死亡に占める主要死因の割合 (昭和53年)

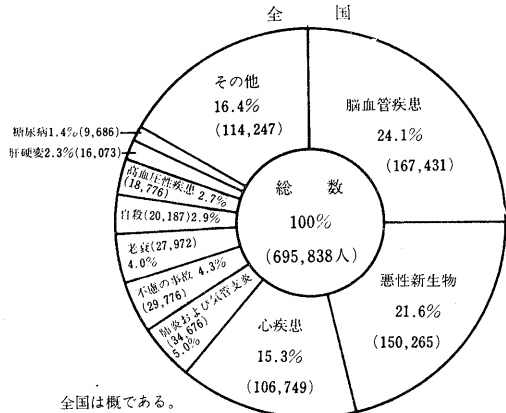
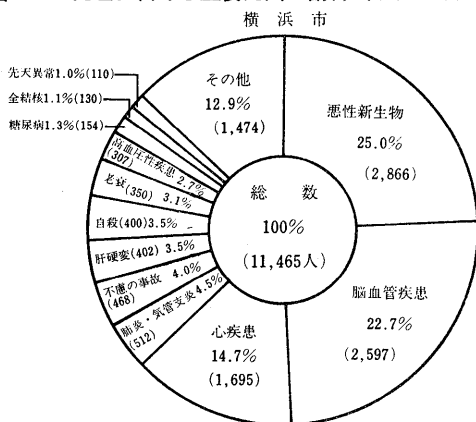


表-3 3ヵ月児健診にみる母の健康状態 (昭和54年 京都府向陽保健所) %

自覚症状	割合 (%)
疲れやすい	41.2
睡眠が十分にとれない	34.1
気がつねにいらいらする	14.1
ほんのちょっとしたことでも気になる	24.1
気がつかうことが多い	21.8

住宅環境	割合 (%)
泣き声など隣に聞こえ、気がねをする	24.3
騒音などやかましい	19.5
休養ににくい	9.9

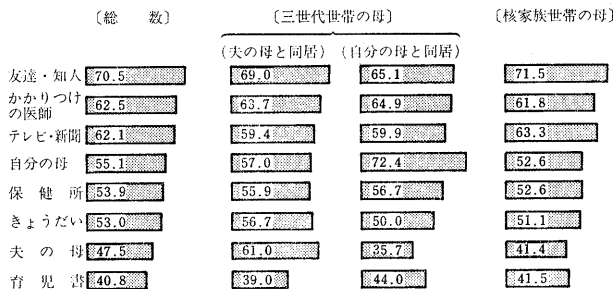
資料 生活教育

表-2 肥満傾向の者 (皮下脂肪厚 男40mm 女50mm以上) の年次推移 (単位 %)

	15~19歳					20~29					30~39					40~49					50~59								
	男					女					男					女					男					女			
昭和48年 (1973)	*10.3					13.1					14.1					14.7					13.6								
50年 (1975)	10.8					12.7					17.8					18.5					16.3								
51年 (1976)	10.1					13.6					16.6					16.2					16.0								
52年 (1977)	10.6					12.2					17.2					17.5					17.6								
昭和48年 (1973)	*12.6					11.7					18.3					26.7					24.9								
50年 (1975)	10.7					12.4					20.7					27.0					25.8								
51年 (1976)	12.1					13.0					21.8					28.0					30.5								
52年 (1977)	14.3					14.6					19.3					27.4					27.7								

注 1) *48年の数値は18~19歳のもの 2) 皮下脂肪厚 (上腕背部+肩甲骨下部)
資料 国民栄養調査

図一 4 家族構成別にみた育児知識の参考にしているもの



資料 厚生省児童健全育成調査

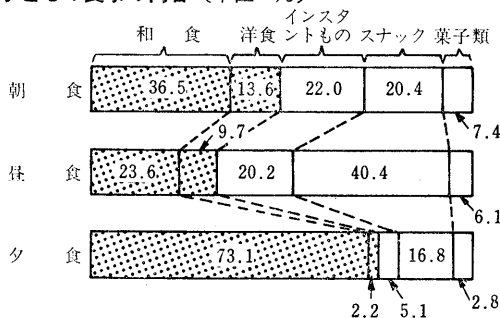
ての中の体力づくりの「まえがき」に「意欲をもって育とうとする子、これを助ける親。これが子育ての基本である」と書いています。

健康な体を育ぐくむためには、その基本となるべきことへの配慮がなくてはならない。

第一に、好みに合わせて、バランスの良い食生活、第二に運動能力、創造力、夢を育てるための安全で大胆な場所、そして人間関係づくり、第三に、自由に語り安心して眠る環境を整備する。

健康な体づくりは、青年期、壮年期、

図一 5 子どもの食事の内容 (単位: %)



- 注) 1) 「和食、洋食」とは、それぞれの献立が揃ったもの
(例: 和食はごはん、みそ汁、栄養のあるおかずなど)
- 2) 「インスタントもの」とは、上記「和食、洋食」より手を抜いたもの
(例: トーストと紅茶だけ、ごはん・みそ汁・たくわんだけ、インスタントラーメン)
- 3) 「スナック」とは、非常に内容の軽いもの
(例: うどんだけ、出前のラーメン、ハンバーガーだけ)
- 4) 「菓子類」とは菓子だけのもの

資料 厚生省 児童健全育成調査

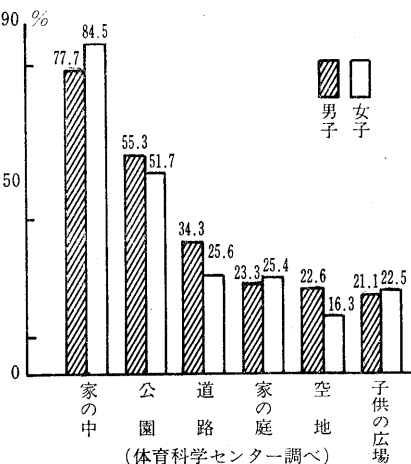
三 健康になるにはお金はかからない

老年期それぞれの年代に応じた生活習慣の修正をする努力が必要であると同時に、その基礎は子どもの時にこそ、容易に作られ得ることを忘れずに、重ねて努力することが、高齢化社会の色どりを変えることになろう。

①—あなたは健康家族だと言いきれるか
昨日、地下鉄で実に美しい光景に出合

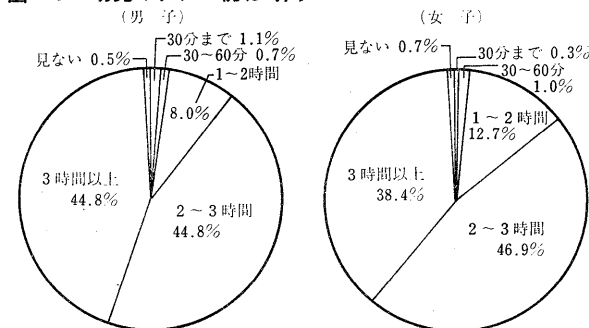
った。九〇歳を超えただろうか。小さくなった一握りほどのおばあちゃんの、脇の下に腕をしっかりと差しこんだ小学生が座っていた。つり革につかまっていた若い母親が「つぎは蒔田、その次で降りるのよ」。耳に口を寄せて通訳をする孫。話し終ると、孫はジョットとおばあちゃんの顔を見てニコリ笑う。おばあちゃんもニコリ笑う。会話が途切れると、孫はおばあちゃんの頬に顔をつける。しわしわの口をもぐもぐさせて孫と顔を見合わせる。ニコと笑う。しわしわの手を、い

図一 6 都市部の幼児の遊び場ベスト 6



資料 文部省 子育ての中の基礎体力づくり

図一 7 幼児のテレビ視聴時間



資料 文部省 子育ての中の基礎体力づくり (体育科学センター調べ)

つの間にか孫がさすっていた。

弘明寺で、若い母親と孫に両脇を支えられて杖をブラブラさせて降りていった三人の後姿は、この上もなく美しく、目が熱くなる感動に見まわれた。

きつとあの孫は、健やかで、心豊かなおとなになり、美しく老いていくだろう。

健康に対する価値観は、それぞれに異なると思うが、家族や、身近な者に、病人や、若死にした者や、老人と共に生活した経験があると、健康への関心は高い。

価値観はどうであれ、改めて健康になるために何をしようかと考えなくても、毎日、毎日の生活の中での一工夫があればいい。

「食べすぎない」「辛すぎない」「飲みすぎない」「喫いすぎない」「いらいらしない」「ゆっくり排便」「スタスタ歩く」「乗らない」「楽しく働く」「よくよくない」「のんびりぬる湯」「十分眠る」。

さて、日曜、休日には、
「子どもと外で」「組んずほぐれつ」「とんだり、はねたり、走ったり」「汗をかき」「テレビで一笑い」「家族の話がとびかう」「手作り夕食たっぶり」。
でも、おとなは「食べすぎない」「飲みすぎない」。

健康を破壊する要因が、日常生活のあ

らゆるところにころがっているからこそ、日常生活にちよつとの工夫とちよつとの努力をばらうことが、健康を維持し、増進させる最も早道だということを忘れてはならない。

② だれがキーパーソン?

社会の仕組みの中で、素晴らしいリーダーが得られるか否かで、果たすべき目標に、いかに効果的に到達できるかがさま

日常生活の中では、だれが「鍵」を握っているかにかかってくる。家族の一人一人の生育歴、体質、性格、趣味、嗜好、くせ、習慣を知るこそ健康習慣づくりのキーパーソンと言える。

キーパーソンは、愛情がなくてはならないし、説得力もなくてはならない。言葉はいらぬ、行動あるのみ。

私は、家庭の健康づくりのキーパーソンは主婦であると考えている。

「主婦よ、家族に愛情を持って強くなれよ!」「主婦よ頑張りよ!」である。私のこの主張をゆるがさないでほしい。

こんな場面に遭遇することがある。大きな荷物をかかえた母親と子どもが、タクシーの待合室に入ってくる。待合室には、七、八人の人がおり、三〇分待たなければ乗れない。「時間がかかるから歩いて行こう。一〇分で家に帰れるから」

と母親は言う。「待ってもいいから、タクシーで帰ろうよ」は子ども。そして、「でも、こんなに待っているから……」

「でも、僕、乗って帰るほうが楽だもん」「しよやがないわね」かくして三八〇円かかる。見ていてがっかり……。

でも、こんな時もある。「混んでいるから歩いて帰ろう。体にもいいし、歩け、歩け……」とサッサと歩き出す母親。鼻を鳴らして「チェッ」とついていく子ども。さすが母親は三人に一人位。

四 健康の価値を知る婦人達

① 婦人達、保健所を知る

私は保健婦という仕事の楽しさを、地域の婦人達によって味わうことが出来た。

もう何年前のことになる。K保健所管内でありながら、神奈川県、西区、保土ヶ谷区を通りすぎて、やっとたどりつくS団地を担当した時のことである。

当時、全国モデルとして出来上がった一、〇四〇世帯の小団地である。ところが、この団地には、いくつもの健康上の問題があった。

一つは、菌を出している結核の患者が多かったこと。妊婦健診の来所者に人工妊娠中絶が多かったこと。未熟児の出生

が多かったこと。新しい団地であるため出生も多くの子どもが多かった。

団地の閉ざれた室内では、結核の家族内感染の危険がある。未熟児の出生は、階段の昇り降りなど妊娠中の生活に問題があるのではないだろうか。人工妊娠中絶は、母体保護の観点から危険が大きい。

そこで、日曜日に開かれる婦人会の定例役員会に出席させてもらい、団地の保健問題について話をした。

「……と言うわけで、この団地では、乳幼児健診や、結核、家族計画の話や母親学級をやった方がよいと思えますが……」

「……と言うと、「私達は、保健所まで遠いので、子どもを抱えて予防注射に行くのが大変なのです。定期の予防注射を団地に出張して来てやってほしいんです」。

保健の話は、もっと有名な先生を呼んで、講演してもらおうので、保健所の人の話は結構です。婦人会長の返事であった。

頭から湯気が立ちそうになるほど腹が立った。これほど痛烈な保健所批判は、はじめてであったから。逆うまい、まず引こう。「特定の団地だけ、予防注射はねえ?」相談して御返事しましょう。

帰りのバスで、よしッ! 三年間、じっくりこの団地ととり組もう。予防注射を足がかりにしてと、やる気が湧いて来た。

特定の団地への出張予防接種は、所内でも異論があった。担当係長は、「だめだよ」と言ったが、四〜五日たつと「S団地のあれね、日本脳炎と百日咳、出張してもいいよ、遠隔地だしね」と言ってくれた。「ついでに、ツベルクリンとBCGもやりたいんだけど……、排菌患者が多いんでね。ドクターには私が頼むから……」「乗りかかった舟だから、協力するよ」。

団地の公会堂で、希望の予防注射を実施した。

しばらく時を置いて、「御希望の予防注射は終了しましたけど、結核の予防注射がまだなんですよね、子どもを結核から守るために、これをやれば、団地の人達に喜ばれますよ」と役員会で投げかけた。先回より受け入れはスムーズでOK。

「ついでに、保育園に行っている子もやるといいんだけど……団地内の保育園を会場に借りられないかしら？」

「婦人会で話してみます。いっぺんに出来るし」かくして未就学児全員を対象に実施することになった。

ツベルクリン実施の時に、結核の感染について、ちょっとだけ話をした。よく聞いてくれた。BCGを実施する時に、結核の発病予防について、また、ちょっとだけ話をした。熱心に聞いてくれた。

ツベルクリンの自然陽転者が多かったので、婦人会長に「改めて、結核の話を団地の人達にしたい」と切り出したところ、会長いわく「冷汗三斗の思いです。大変失礼な発言をした。この団地の健康問題について、保健所がこんなに一生懸命に考えてくれていたとは思わなかったので……前言をとり消します。みんなの為に良い活動なら、婦人会が協力しますから、何でも言ってください」

私は、この団地の保健活動の中で、実に沢山のことを勉強させてもらった。

家族計画指導は、同じ棟の同じ階段の人達が集まっても本音が出ないこと。別々の棟の人をとびとびにより出すこと。

相談指導の折々に、婦人会活動の素晴らしさを住民にPRすることが、翌年の婦人役員選出の時に、同じ人が選ばれること。団地内を歩いていると、「保健婦さん」と呼んでくれ「あそこの家、赤ちゃんと生まれたのよ、訪問してあげたら」と情報を提供してくれること。「保健服を着ているから、すぐわかるわ」

だ、そうである。

団地では、こうして、予防接種、住民検診、乳幼児健診、母親学級、さまざまな衛生教育を実施した。年間二〇〜三〇回の保健活動があった。勿論、保健所のドクター、保健婦、栄養士、特に事務職員や運転手の絶大な援助があった。

婦人会の役員は、ほとんど再選されて顔なじみが多く、団地の予算にも保健予算を計上した。団地内の開業医も協力を申し出てくれた。婦人役員達は、人集めに走り回り、乳幼児健診では、身長、体重測定を手伝い、参加者の混雑の整理や受け付けもしてくれた。年間の計画も粗案は、婦人達が作れるようになった。

②—あなた使う人、私使われる人

この婦人達はよく協力してくれた。ところが、三年たった夏、この団地は、分

区で他の保健所の管轄区となり、別れの時が来た。婦人達はこの間に、団地住民の健康問題を真剣に考えるようになっていた。新たに管轄となった保健所から、

「S団地は、いろいろなことを保健所に要望してくるので……と伝えられた時、婦人達は協力をしてくれたのではなく、私が協力させられたのだ」ということに気がついた。

団地住民の健康のために、社会資源としての保健所を、そして保健婦を、みづろに活用した「すばらしい婦人達」に敬意を表するのみである。忘れ得ぬ人々であった。

五——健康でいたいもの
この指とまれ

朝の食事がおいしい。職場への足が軽い。子どもは遊びに外へとび出す。夕方家に帰るのが楽しい。ああ、いいおふろだなあ〴〵と思い、ふとんの感触が格別で、今日も一日終った充実感で、静かに眠りに入る。こんな一日を、私は健康だと考える。

今、健康を考える時、切実な危機感を持って。住宅環境、公害、日常生活品、交通過密、社会的ストレス等々健康を阻害する因子は山ほどある。これらの問題を解決するために、住民パワーが結束することは大きなことである。でも、すぐには解決出来ない。また、これらのマイナス因子は、私達が、長い時をかけて生み出して来てしまったものであることも否定出来ない。より便利なものをより快適なものをより楽なものよりより高度なものをというように……。

だからこそ自分の健康は、人が作ってくれるものではない。自分でしか作り出せないものだという自覚と努力をしなければならぬ。自分で努力しないなら、健康が破壊されても嘆くまい。しかし、自分の不健康が、愛すべき家族を奈落の底へ追いやることになれば、それは家族の一員としての責任感の欠落と言わざるを得ない。努力をしているのに、病むことになれば、暖かい家族の介護に、身をゆだねることを遠慮することはない。そ

れが家族と言うものだから……。私は、こう考えている。

衛生行政は、個人では解決の出来ない、大きな保健医療施策と共に、つい息りがちになる人間の弱みをフォローするため、個人衛生に関しても、さまざまな施策を講じている。

良い結婚、健康な家庭づくりのための結婚セミナー。

良好な妊娠生活をして、良い子を生むために、母親学級や妊産婦健康相談。

子どもの健全育成をはかるための乳幼児健康診査。

結核やがん、脳卒中等の予防と早期発見のための住民検診、がん検診、循環器検診。

伝染病予防のための予防接種。

適正な治療を継続するための援助として各種の医療費公費負担制度。

健康で長生きするために、高血圧、糖尿病、貧血、老人看護法など、さまざまな衛生教育。

未熟児や乳児、幼児、結核患者、精神障害者、難病、ねたきり老人など必要あ

れば、家庭訪問指導や看護も実施している。

加えて、環境衛生監視、食品衛生監視、日常生活品のことなど、行政としての努力はつづけられている。

しかし、このような「保健サービス」を、「めんどうだから」とか、「健康だから」とか、「遠いから」とか……検診を受けない者も多い。

「知っている話を聞いても仕方がない」とか、「わかっているんだ」とか……衛生教育に集まらない人も多い。検診や衛生教育は「知らないから、知らしめる」と言うものではなく、くりかえし、くりかえし、検診を受け、話を聞くことによる、また、話し合うことによる自分への刺激とは考えられないだろうか。

特に働きがりの男性に対するアプローチは、保健婦活動の中でも最も苦勞するところである。

「酒が飲めなければ、生きていても仕方がない」「うまいものを食べて、太く短かく生きればよい」など、それなりに言い分はある。私とて、たまには「そうだ、最もだ」と思うことだってある。し

かし、人間、そうはうまく問屋がおろしてくれない。

太く短かく、突然、死ぬるといふものではないからだ。

だからこそ、衛生行政は、その人間の弱みと背中合せに、苦しみながら努力をし、住民のニードを的確につかんでいかなければならない。

目前にせまる高齢化社会のためにも、更に、検診体制を整備し、衛生教育の場を積極的に拡げていかなければならない。今まで以上に衛生、民生、公害対策各局の連携を深め、更に教育関係者とも手をたずさえ、地域の医師との暖かい交流を求めながらスクラムを組んで行きたい。

そこには、二七〇万市民の積極的な参加がなければ、全く意味のないものになってしまう。

「健康でいたい者、この指とまれ」心から叫びたい気持である。

六——エビローグ

「かーごめ、かーごめ、かーごの中の鳥

は、いつ、いつ、出やーる。夜明けの晩に「鶴と亀とすべった。後ろの正面、だーれ？」

子どもの時は、みんな仲良く手をつないで遊んだ。目かくしをした私の後ろに、だれが立っているだろう？……。

輪の中で、しゃがんでいると、みんなが私を見ながら、輪になっている感じがとても幸せであった。

こんな、おとな社会があったら、どんなに楽しいだろう。一人で努力することは大変でも、何人か手をつなげば、つまり引っぱりあげてくれる。そこに弱い者がいたら、輪の中にそっと入れてみんなで助け合おう。

私は保健婦だから、こんな輪を作りたい。真ん中にお年寄りの輪を……そして、子どもの輪を……三列目には、中年の輪を……一番外側は、若々しく、たくましい青年の輪を……。

ひとつ出来たら、また次の輪を……そしてまた、次の輪を……次の輪を……。

〈衛生局保健予防課主査〉